た。二十三年にやっと解放され帰すと知らされたが、本当に帰れるのか信じられなかった。

ナホトカに来ると、各所の兵でふくれあがり、毎日革命歌を唄い、順番を待つ。十月も終りころ、やっと乗船できた。ソ連服を着、毛ほどの遺品も許されなかった。船内では朝まで二派に分かれ、激論を交わす。舞鶴港に来て初めて実感がわく。

入隊してより五年十か月、日本の土をようやくにして踏む。舞鶴での政府の報酬は、夏冬上下の衣類と千円であった。これより裸一貫で生きて行かねばならぬ！ソ連帰りと白い目で見られ、三年ほどは思うように職にもつけなかった。

最後に異国の地に眠る同胞を偲び、筆を擱く。

## タシケント抑留記

福岡県　日野治水

我が椿隊二百人が炎天下のタシケント第五収容所に入所したのは昭和二十一年七月下旬であったと思う。この第五収容所は市街地からトラックで約三十分くらいの郊外で、先に大西隊約三百人、川崎隊約二百人が入所しており、建築作業が主力、他に機械工場や道路建設等にも出役していた。入所と同時に前職の調査があり、私は左官で登録し、休む間もなく翌日かられんが積み作業に従事した。

タシケントは中央アジア南部の大平原で、農業商工業の盛んなウズベック共和国の首都であるが、入ソ当時は荒廃がひどかった。緯度は青森県くらいと思ったが、大陸性気候が強く、五月中旬から九月中旬までほとんど降雨はなく、特に七～八月は連日四十数度の酷暑で草原地帯は砂漠となる。積雪は多くないが、十月下旬から翌年三月下旬までは零下十度～三十度の酷寒凍土というような所であったが、シベリア鉄道沿線の収容所に比べ、厳冬の期間が短かったことが不幸中の幸いであったと思う。夏は熱く冬は泥が凍って左官作業は苦労した。特に粗悪些少な給食と南京虫には困った。昭和二十二年夏ころからタシケントでも民主化運動が始まり、社会主義共

鳴者や、ハラショラボータ、病弱人がぼつぼつダモイした。

仕事の関係で第九収容所に移り、大きな工場建設に従事する。このころから給与、労働条件が少しずつ改善されていった。

昭和二十三年八月上旬突然帰国命令で全員広場に集合したが、最後まで名前は呼ばれず失望落胆。六百余人の喜び勇むダモイ組を涙をこらえて見送る残留者はわずか五十数人。

約二万人といわれたタシケント地区抑留者が帰国し、各収容所から第九収容所に集結した残留組は約四百五十余人で、元諜報関係、対ソ侵略容疑者、反ソ的思想の人が多く「ダモイなし」の流言が飛ぶ。満州から四年有余苦労をともにした友も全部帰国し、異境での労苦失意で作業中も涙、ラーゲリでも毎晩泣いたものである。

このころから次第に食欲もなくなり、精神的憔悴と栄養失調に耐えながら過酷な強制労働に出役していたが、大陸性気候の急変などで身体の諸病に対する抗病力の減少と疲労が重なり、昭和二十三年十二月下旬作業中両手足の関部疼痛を自覚。疼痛は日増しに増大するもソ連の軍医（女医）は痛かったら熱が出ると受付けない。

昭和二十四年一月上旬には疼痛の部位も両手首から両腕、足関節へと拡大し、四十度近い発熱で労働困難になり一月十日受診。受診の結果、関節リウマチと診断され入室作業休となるも薬はなく、満足な手当ては受けられなかった。

約二ヵ月ラーゲリ内の軽作業に従事していたが熱も下がり、手足の疼痛は持続するも身体検査で三級となり、同僚十数人とともに帰国まで六か月余りブドー酒工場の雑役に出役した。ノルマは厳しくなかったが、給与もなかった。ただ監督の目を盗んではブドー酒を吸飲しながら適当に働いたものである。

昭和二十四年九月中旬、待ちに待ったダモイ、今度は名前があった。初秋のタシケントを出発したがシベリアはもう吹雪であった。帰りの列車はお祭り気分で、二十五日目ナホトカに到着。氷点下のナホトカには帰国を待つ先着者であふれていた。やっとナホトカに着いた我がダモイ組は社会主義再教育のためハバロフスクに一か月

余り後戻り。

いよいよ帰国のため復員船栄豊丸に乗船できたときにはうれしくて涙があふれた。十一月二十七日ナホトカ出航。

復員船栄豊丸がナホトカ港出航と同時に、赤旗組（共産主義者）と日の丸組（反共者）の対立抗争で船内は大混乱。船長の指示で日の丸組は分離。日の丸組と赤旗組は船室を区分され、舞鶴では別々に下船復員した。

私が舞鶴に上陸したのは十二月四日で、復員十二月十一日である。

村長さんはじめ親類地区住民の方々の出迎えを受け故郷の筑波大石駅に降りたのは、昭和二十四年十二月十二日。思えば赤紙召集で故郷のこの駅を出発して以来五年九カ月目のことであった。

## 忘れえぬ日々

岩手県　梅津盛一

ソ連軍の指揮下に入ったのは、昭和二十年九月上旬だった。それまで奉天市内の北陵に集合させられた。約千人ぐらいの単位で他にもたくさん集まっていた。ここでは毎朝の点呼のほかは、附近の跡片づけ作業をする程度であり、約一か月ぐらいはこのような状態が続いた。なにしろ戦争が終わったのであるから、いつ帰してくれるのか、毎日そんな話題でもちきりであった。十月に入ったころ移動の命令が伝えられた。いよいよ内地へ帰れるという情報や、いや、強制労働させられるそうだというわさもあり、期待と不安にかられながら皇姑屯駅から客車に乗せられた。何分にも戦後の混乱期だったので、輸送も円滑ではなく、停車をしている時間の方が長かった。ところが、気がついてみると、北へ北へと向かって